

茶苑櫻新町文語教室 平成廿七年十月廿六日

去る十月十七日土曜日、室蘭にて「文語の苑シンポジウム in 北海道」開催さる。當日は見事なる快晴にて眞に温暖、會場の室蘭市港の文學館は陽當り良く室内は汗ばむ様にて、北海道には例外的なる暖かさなりき。参加者約二百人、姫路シンポジウムとも數を競ふる盛況なり。各先生方至極御満悅なる御様子なれば主催者側の一員として一安心なり。シンポジウムの内容に付ては來年の小冊子に寄稿豫定なれば、此處は別なる經驗を述ぶるものなり。

シンポジウム打上會も終へホテルの部屋に戻れり。貴重品用の金庫有り、念の爲一應財布は金庫に収納すべく、鍵を挿入し右へ廻さむとするや、其鍵何の抵抗も無く脆くも折れたり。力を入れたるに非ず。所謂金屬疲勞なるか。驚きて一階帳場へと赴く。

「鍵壊れたり」

帳場には若き女性二人有り。其一人に折れたる鍵の先端部分と、キーホルダーに残りたる根元部分とを手渡せり。キーホルダーには客室の鍵も附けられたり。其女性、キーホルダーに残りたる金庫の鍵の頭の部分を取外し、何も言はず部屋の鍵を余に渡せり。

余 「金庫の鍵は？」

其女性、隣の女性に 「豫備の鍵は存するや？」

隣の女性答へて 「無し」

そして余に向かひて 「ありませぬ」

余 「貴重品は如何にすべしや？」

女 「部屋の鍵を掛ければ入室不可能なり」

余 「さらば金庫は何故に存すや？」

女 「・・・」

當地にては、部屋の金庫を使用する等と云ふ客は甚だ珍しき奇人なるべし。室蘭の地の如何に安全なるかを改めて知れり。

(平成二十七年十一月九日受附)